

とかす力 (八木重吉の詩を愛好する会会報)

(事務局及び会報) 〒270-1406 千葉県白井市中 205 小林正継

☆ 第 30 号

☆2023 年 (令和 5 年)

12 月 24 日 発行

E メール kmat27aiko@gmail.com

携帯電話 09061674553

★ 茶の花忌報告

2023 (令和 5) 年の茶の花は、昨年に続いて晴天に恵まれ、約 70 人の参加がありました。

12 時半からの墓前礼拝は、昨年と同じ牧野信次牧師が司式と感話をしてくださいました。評論家の若松英輔氏が重吉の詩を味わうには声に出して読むのがいいと言われたことに共感して、この日解説しようとした詩を全員で音読することになりました。8 つの詩を読んで解説がありましたが、〈素朴な琴〉については、琴はギリシャの堅琴を連想し、乾燥した気候のギリシャで聞くと澄み切った音色がしてくると述べていました。



中庭へ移動して 13 時から「八木重吉を偲ぶ会」は、まず茶の花忌準備委員長八木幹夫氏が「重吉さんの津久井方言の美しさとやさしさ」のタイトルで、御影時代に編まれた詩稿「丘をよちる白い路」の中にある無題の詩 (〈眼のなみだは?〉で始まる詩) を引用し、体調を崩した祖父を見舞いに訪れて帰るときの祖父とのやりとりが詩になっていて、方言をしゃべる祖父への愛情

が伝わってくると語り、標準語というのを作ったために、いつしか私たちは方言を蔑むようになってしまったとも語っていました。

続いて 2 人の方に「茶の花忌に寄せて」という事で自由に語って頂きました。(杉浦信男様は怪我の為欠席)

苅部幹央氏は八木重吉の「かなしみ」について長く研究していますが、今回も深い分析を示してくださいました。江藤淳の『詩人の肖像』の中に「八木重吉の詩はキリストを指しているかも知れない。しかしそれはキリストのみを見ようとする人々に見えないものを示している。それが彼の詩篇の文学的深さである。」を引用され、キリスト者は「かなしんでいる人達は幸いである。彼らは慰められるであろう。」というイエス・キリストの言葉によって、かなしむのは神の恵みを受けるきっかけともなるから、かなしみは、かならずしも否定的な言葉ではないと理解はできるが、重吉の詩に出て来る〈かなしかれ、かなしかれと祝われながら〉や〈かなしみを食べていきっている〉という表現になると戸惑う人もいる。キリスト信仰を超越したものとあると批評される詩人であるゆえに、重吉は信仰を持ちながらも護教的詩人ではなく、信仰者以外にも愛されるのではないかと語られました。

町田市民文学館の神林由貴子氏は、八木重吉の生誕 125 年を記念して、来年の 2 月 6 日～4 月 7 日まで詩集を 20 点ほど展示、1 月 24 日から大正期の少女の手紙を展示する催しもあり、重吉の登美子宛てのラブレターも 10 点ほど展示する予定だと案内してくださいました。

そのあと恒例になった詩の朗読が地元のサークル「ちえの環の二人によって、〈おおぞらのこころ〉、〈ぼくぼく〉、〈素朴な琴〉、〈響き〉、〈秋のひかり〉が朗読されました。

続いて昨年もしていただいた、ギター弾き語りによる詩の歌唱が YO-EN (ヨ-エン) 氏によって、〈貫く光〉、〈心よ〉、〈あるときはうたをつくるのさへ〉、〈かなしみの日でなければ〉、〈まり〉、〈おほぞらの水〉が歌われました。

続いて今年初めて、重吉の詩を身体で表現するグループ「越部清美氏と仲間たち」(越部さんは法政大学の教官で表現する学生は武蔵野美術大学的女子学生たち) が、「ねがい」や「雨」の詩の世界を表現しましたが、独自に編曲した音楽を流しながら学生たちが一種の踊りとも言える動き (学生たちが感じ取った自由な動きだとのこと) で演じていました。初めての鑑賞なので、何とも言えない不思議な身体表現でした。



休憩の時間を 10 分ほど設けましたが、この時に受付で記入していただいた参加者の自己紹介を小林が全部一気に読み上げ、少しでも参加者同士が交流できる時間にしました。ただ交流の時間は取れなかったのも、日程の終了後に声を掛けあう際に役に立ったかと思います。

終わりに近づき、館長の八木明男氏の挨拶、2歳半の子どもを持ち、妻子を愛した重吉の気持ちが理解できるようになったが、やはり重吉の「かなしみ」についてはよくわからないと語りながら、参列者の皆様に茶の花忌参加へのお礼を述べて終わりました。最後に事務局の小林より茶の花忌の名前の由来と、高齢化による茶の花忌運営の厳しい状況を伝えました。そして3時少し過ぎにすべて終了となりました。

★茅ヶ崎の集いの報告

茅ヶ崎の詩碑「蟲」が平成17年に建立されてから18年になりますが、茅ヶ崎では毎年10月の初めに建立記念の集いが開かれています。集う人数は多くはありませんが、茶の花忌と同じく毎年集まる努力がされていて素晴らしいことです。小川宣二さん（かなりの高齢でこのところ手紙の返信が来ないので心配ですが）が早くから重吉の愛好者となり、詩碑建立を長い間願って来られ、歌人の川井盛次さんが加わることで具体的な建立運動が進み、待ちに待った詩碑が出来たこともあり、建立後も愛好グループは詩碑を守るべく毎年詩碑の所に集まって集いを持っているのです。そのメンバーの一人亀井瑞世さんが集いの写真を送って下さいました。川井盛次さんは数年前に大けがをされ回復途中にあるとはいえ、今回もまだ車イスでの参加でしたが、美術館前の高砂緑地の中にある詩碑は、とても落ち着いた良い環境にあります。茅ヶ崎の皆様の熱意もあり、今後も集いが続いていく事でしょう。メンバーの一人の太田きよこさんは茶の花忌に来て下さり、終了後に愛好会仲間と交流も持つことが出来ました。



★YO-EN (ヨ-エン) さんのワンマンライブの案内

茶の花忌でギター演奏と歌唱を披露して下さいました

YO-EN さんが、今度は町田駅でライブを開催します。

- ・日時 3月16日(土) 14:00～(13:00開場)
- ・会場 町田・純うどん「町田タロー庵」
- ・投げ銭制 要ワンドリンク(小鉢つき)
- ・問い合わせ「ギャラリービブリオ 042-511-4368」



*会場の「純手打ちうどん 町田タロー庵」は横浜線 町田駅ターミナル口より徒歩6分、同北口より徒歩9分、小田急線 町田駅より徒歩11分という立地。「町田市民文学館ことばらんど」から徒歩一分。「練って、踏んで、伸ばして、打つ」、粉から一切の機械を使わず手打ちするうどんとともにユニークなライブイベントで知られる町田の名店です。住所は町田市原町田 3-8-23 電話 090・1264・0385 です。是非お出下さい。

★音楽家の、こいずみ ゆり さんよりCDアルバム『アメイジンググレイス』の寄贈

こいずみゆりさんから、次の詩が八木重吉全集のどこにあるのかという問合せがありました。

よのなかのひとがみいんな/ひとつの家にすまえたらいいのに/あたえるという きもちもなく/
うくるという きもちもなく/ただかんしゃし ただいつくしみ/そして あらゆるものは/
そうごんなしずけさにもえるのだ

現在の厳しい世界情勢に暗い気持ちになりがちですが、そのような暗闇に輝く灯火のように、重吉が穏やかに歌っている良い詩だなおもいつつも、『秋の瞳』や『貧しき信徒』の中には無い詩だと思いました。文庫本の全集の目次をまず探そうと思いましたが、自分の認識では『秋の瞳』時代の詩稿の中にある気がして八木重吉全集Iを取り、何気なく1回ばらばらとめくって開けたページがありました。するとページの最後の詩が、まさに探そうとしていたこの詩でした。早速「八木重吉全詩集I」の249ページ〔欠題詩群二〕の中にお問い合わせの詩がありますと返答出来ました。その詩には赤線を引いてあり、私も気に入ってチェックしておいた詩の一つでした。

その後、「とかす力」29号を送ってあげたところ、『アメイジンググレイス』と題したCDアルバムが送られてきました。寄贈いただいたので聞いてみると、清らかな調べの歌で魅了されました。YouTubeでも見られます。インターネットに公開されている略歴を紹介しておきます。

アルバム『アメイジンググレイス』

- ・神戸市生まれ。大阪音楽大学器楽科卒業。
- ・教会への奉仕を続ける中、主に祈りのための歌を作詞・作曲。
また、受託作品の制作や金子みすゞ、八木重吉の詩にも作曲。
- ・子どもと保護者向けキリスト雑誌『こじか』(オリエンス宗教研究所)
で約30のオリジナル作品を発表。
- ・2010年に1stアルバム『風の中に』、2013年2ndアルバム『空色の花』をリリース。



・学校・病院・教会などのミニ・ライブのほか、神戸、東京、京都、大阪、福島などでコンサートに出演とありました。金子みすゞ、八木重吉の詩にも作曲、とあるように、心の純粋な詩人の詩を歌いたいと思っている歌手です。そして彼女について驚いたことがありました。お住まいが神戸市灘区永手町なのです。御影のすぐ近くなのです。会報を送りつながっている熱心な研究者である河村梢さんが御影に住んでいます。重吉ゆかりの御影周辺に愛好者が複数いる事はうれしいことです。こいずみさんの今後のさらなる活躍を願っています。

★ 加藤千草さんより貴重な新聞資料をいただく

2022 年の 1 月に亡くなられた加藤正彦様の夫人である加藤千草様より、1976 (昭和 51) 年の『町田ジャーナル』新聞記事が提供されました。その年に開催された「八木重吉展」の話題中心に、八木重吉 50 年祭実行委員会の活動が紹介されています。記事の一部 (八木重吉展、加藤武雄氏文章、野坂純一郎氏文章) を紹介します。

*この新聞記事が発行された昭和 51 年は、八木重吉五十年祭実行委員会が結成され、10 月 19 日から 25 日まで町田市民ギャラリーで「八木重吉展」。10 月 24 日に相原小学校で八木重吉 50 年祭 (四瀬経夫氏、田中清光氏が講演)。10 月 26 日吉野登美子著『琴はしずかに』の出版がありました。またこの新聞記事の中には、実行委員長や市長の挨拶に加えて、ここに紹介した加藤武雄氏、野坂純一郎氏という親族関係者の記事の他にも小川武満氏の「重吉の信仰の強さ」という記事も載せられていました。この盛り上がり、加藤武雄氏の尽力もあり、その時の当主八木重吉記念館の開館そして「茶の花忌」の名称を冠しての命日の催しとなって定着していく事になります。

古い新聞 (昭和 51 年 10 月 25 日) のコピーですで見にくいところがありますがどうしてもありますのでご了承ください。

郷土詩人「八木重吉展」

八木重吉五十年祭実行委員会主催

八木重吉展が西友町田店七層市民ギャラリーである十九日から十月二十五日までの開催期日スタートした。主催八木重吉五十年祭実行委員会。八木重吉は、明治三十一年、摩多摩郡相模村大戸 (現町田市相模町) に生まれ、昭和十一年、妻と共々幼い二人の子供を残して、わが三十二年という短い生涯をひっそりと閉じた。肺結核であった。

詩人としての重吉は、生前ほとんど無名だったといわれている。しかし没後五十年をむかえた今日、重吉の詩が放つ光は、ますますそのよき美を呼び、われわれの胸を暖くうごめかす。それは詩人重吉の心までも柔和でやさしい魂とあたたかい誠実な心が詩の行間から伝わってくるからである。

重吉の詩を二篇でも読んでいただくとある人ならきっとそのことがわかっていただけると思われる。今回の八木重吉展は、そのほんの一部ではあるが、明治、大正、昭和の三代を短時間で駆けぬけて進んだ、秋の光のような詩人の軌跡を自筆の詩稿を通して追ってみたい。この一見をぜひとらえてみる。筆墨から、高村光太郎のいう「きよい心のしたりのような」重吉のつぶやきが今にも聞えてくるような気がしてくる。この重吉展のほか、二十四日には彼の生家相模町で墓開祭、記念講演会、懇話会が催される。

「八木重吉展」は正面に八木重吉の洋装姿の肖像を掲げ、その左に詩碑のパネルを、その下に詩碑の複製となった「貧しき信徒」の中の「素朴な詩」の原稿の拡大複写を額に入れて展示した。

また後面の四角は彼の詩稿の拡大複写と大戸部落の俯瞰写真、旧大戸分校写真、彼のアルバムから選んだお札の書簡、はつた大詩稿の複製など、そのほかにも、

「八木重吉展」は正面に八木重吉の複製で構成し、会場中央パネルには写真家・田中清光氏のイメージに詩碑のパネルを、その下に詩碑の複製となった「貧しき信徒」の中の「素朴な詩」の原稿の拡大複写を額に入れて展示した。

また後面の四角は彼の詩稿の拡大複写と大戸部落の俯瞰写真、旧大戸分校写真、彼のアルバムから選んだお札の書簡、はつた大詩稿の複製など、そのほかにも、

「八木重吉展」は正面に八木重吉の複製で構成し、会場中央パネルには写真家・田中清光氏のイメージに詩碑のパネルを、その下に詩碑の複製となった「貧しき信徒」の中の「素朴な詩」の原稿の拡大複写を額に入れて展示した。

重吉の詩について

加藤 哲雄

この明るさの中に
一つの素朴な詩を掲げ、
秋の美しさに耐えかねて
筆は静かになり出すだろう

これは重吉生家の前の詩碑に刻まれた詩である。私は詩を作っていないから、詩人的な詩の批評は出来ないが、この詩のよさに、重吉の自然を捉えるというか、自然の中に浸って自然をいかに心に感じたかが、この詩の中によく出てくる。たゞ、神の機がれた一つの詩でも、秋の自然の美しさ、静けさ、自分から暮らしたすといふ、特異な自然な感じ方での捉え方は、素直な心でないと通らないことである。又、この詩がある。

秋になると
果物はなにも忘れてしまつて
うっとりとしてゆくわが心

これも重吉の同じく秋のあふくくが、自然の中で、果物がう

★ あなたの「八木重吉との出会いとその詩の魅力」原稿、継続募集中

題：「八木重吉との出会いとその詩の魅力」（この内容に沿うなら別のタイトルでもOKです。）

字数：2000字程度（原稿用紙5枚程度、パソコンのワード歓迎）

送り先：メール（kmatt27aiko@gmail.com）か、

郵送 〒270-1406 千葉県 白井市 中205 小林正継

*HPアドレス <http://www.yagijunaiko.com/>

前ページからの続き→

つとりと（作者重吉ともども）実つてゆくと感じる方、柿でも無葉化でもよいが、その秋の日照しのよさを心にいまでも表出している。

重吉が自然を見る目とキリスト者として神に接する心とは同じものであったのだ。敬虔な自然の推移は、極めて自然の形で宗教としてのキリストに傾いていったのだ。それは重吉の純真な、素直な心の底に、何かしら人間が生きてゆく上の不安を感じての一つの細りを求めた、そこにキリストがあり、信仰があったと思はれる。

創造の世界である文学の尊さはいかに物を見、いかにものを考へることがという点であつた。高村光太郎が「心のいちばん奥の、ほんとうの中核のものを捉へられている」と讃辞を贈したまはったのはその点である。

（八木重吉五十年経典実行委員会 副実行委員長、城山至任、敬人）

聖書

学生時代の夏休み、重吉と私の明け暮れは養蚕の手伝いで、縁側で夜更を仰ぎながら毎晩話し合った。

「聖書を読め。山上の垂訓を待

てよ」と。ここにキリストの教えが要約してある。バイブルとは書物の中の書物という意味だ。聖書一つあれば他は本はもいらな

い。後年、英文の聖書にあきたらずギリシヤ語を独学、バイブルの原典をギリシヤ語版で読み、キリストの心により近づこうと努めた。

北村透谷全集

私の豊島師範学校時代の英語の先生の一人は透谷未亡人・北村美那氏であった。私の紹介で重吉は高師在学中に北村美那の年譜を訪れ面談したことがあった。

当時の感想を重吉が持っていた透谷全集の最後のページに次のように記している。

「七年六月のある日、美那子氏を半入道新小川町に訪れた時、記けた」と言ったが、私は二十余

を讀んでいる。

重吉が自選詩集『秋の瞳』を出版する直前、「とてもよい名をつけた」と言ったが、私は二十余

を讀んでいる。

重吉が自選詩集『秋の瞳』を出版する直前、「とてもよい名をつけた」と言ったが、私は二十余

を讀んでいる。

重吉が自選詩集『秋の瞳』を出版する直前、「とてもよい名をつけた」と言ったが、私は二十余

を讀んでいる。

重吉が自選詩集『秋の瞳』を出版する直前、「とてもよい名をつけた」と言ったが、私は二十余

を讀んでいる。

重吉が自選詩集『秋の瞳』を出版する直前、「とてもよい名をつけた」と言ったが、私は二十余

を讀んでいる。

重吉が自選詩集『秋の瞳』を出版する直前、「とてもよい名をつけた」と言ったが、私は二十余

を讀んでいる。

重吉の愛読書、その他

野坂純一郎

食としてはたつたこれだけです、年もたつてから、キーツ詩集のと、古い小形のほとんど色のあせ

てしまった二葉の写真を出して見付いたのであった。

「秋」との関連があることに気が付いたのであった。

出家とその弟子

重吉が高師在学中の冬休みのことである。

「とてもよい本だ、読め」

私に広島遊中、重吉はキーツ

と云つて、倉田百三の、当時評

判のこの書を出して見せた。

重吉の研究に私を乗訪される方

その他

重吉が自選詩集『秋の瞳』を出版する直前、「とてもよい名をつけた」と言ったが、私は二十余

を讀んでいる。

重吉が自選詩集『秋の瞳』を出版する直前、「とてもよい名をつけた」と言ったが、私は二十余

を讀んでいる。

重吉が自選詩集『秋の瞳』を出版する直前、「とてもよい名をつけた」と言ったが、私は二十余

を讀んでいる。

重吉が自選詩集『秋の瞳』を出版する直前、「とてもよい名をつけた」と言ったが、私は二十余

を讀んでいる。

重吉が自選詩集『秋の瞳』を出版する直前、「とてもよい名をつけた」と言ったが、私は二十余

を讀んでいる。

重吉が自選詩集『秋の瞳』を出版する直前、「とてもよい名をつけた」と言ったが、私は二十余

を讀んでいる。

重吉が自選詩集『秋の瞳』を出版する直前、「とてもよい名をつけた」と言ったが、私は二十余

を讀んでいる。

重吉が自選詩集『秋の瞳』を出版する直前、「とてもよい名をつけた」と言ったが、私は二十余

を讀んでいる。

重吉が自選詩集『秋の瞳』を出版する直前、「とてもよい名をつけた」と言ったが、私は二十余

○ロシアとウクライナの戦争に加えてイスラエルとガザの戦争が勃発してしまいました。憎しみの連鎖はますます多くの死傷者を生むだけです。人間は物でなく命なのに。心傷ついた名もない一人の人間の心を、癒して生きる希望を与える力を秘めた八木重吉の詩が、多くの読者に読まれている世界を夢見ます。皆さん、良き年末年始をお迎えください！

あるとき私に言ったものだ。

「伯父の色黒いのは一あの

ようなのを保護色と言つた

●スペイン風邪が流行した大正七

年に、重吉は東京大塚の寄宿舎で

罹病した。先輩であり恩人の一人

でもある内藤三郎先生と私は、

彼に付き添ひ神田の橋田病院に入

院させた。

父藤三郎は上京して二カ月前ま

り重吉を看病、三月のある日退院

し自宅療養をすることになった。

ために後進級、四月下旬に出校し

た。

●郷里相模原大戸の裏山には山桜、

椿などがあった。重吉は病後、こ

の山桜を短歌に詠んでいる。

久しうも病みつるものかわがゆ

けはおおけきき花散る

●重吉の生家には長兄政二が愛読

した「牧水歌集」があった。重吉

もこの歌集に親しんでいたよう

である。

（筆者は八木重吉実弟）